

## 【研究ノート】

# 地域主義・地域（主義）政党・地域ポピュリスト ——概念に対する一考察

[Research Note]

Regionalism, Regional(ist) Parties, and Regional Populists:  
A Consideration for the Concepts

宮内 悠輔

MIYAUCHI YUUSUKE

はじめに

第1章 地域主義とはなにか

第1節 「地域」を定義する

第2節 地域主義を定義する

第3節 ナショナリズムと地域主義

第4節 地域主義・分離主義・離脱主義

第5節 エスノ地域主義

第2章 地域政党とはなにか

第1節 地域政党・地方政党・地域主義政党——その定義

第2節 エスノ地域主義政党

第3章 地域ポピュリスト政党

第1節 ポピュリズムとはなにか

第2節 地域主義とポピュリズム

第4章 総括

参考文献

資料：国政選挙で議席を獲得した西ヨーロッパ地域主義政党の議席／得票率

## はじめに

戦後西ヨーロッパにおける政党政治は、リプセットとロッキンが提唱したところの「社会的亀裂」(social cleavage)に規定された政党配置 (Lipset and

Rokkan, 1967: 23-4, 50)<sup>1)</sup> から始まる。この前提条件はしかし、環境政党や急進右翼政党といった、新たに政治アリーナに参入してくるアクターによって徐々に変容していく。その巨大なストーリーの中で、特定地域を拠点として活動する「地域政党」の存在は、現実政治においても学術界においてもこれまで周縁化されてきた。地方・地域選挙だけでなく、時に国政選挙においても多くの支持を集める地域政党とは、一体いかなる政党であるのか。

ヨーロッパにおいてだけでなく日本においても、地域政党を研究することの意味は近年急速に高まりつつある。金井利之が論ずるように、日本では長く「地域主義政党」<sup>2)</sup>を生み出すような、良くも悪くも、地域的亀裂は鎮撫されてきた」(金井, 2013: 48)。しかし一方で、近年は地方選挙レベルで地域政党の候補者が全国政党の候補者を破る事例が散見される。特に「大阪維新の会」については、同党を中核とした「日本維新の会」を組織して全国選挙へも進出し、国政第二党である民主党に迫る議席数を獲得したことで、一時は日本の政局における「第三極」として注目を集めた(Żakowski, 2013: 166-7)。以上のような経緯から、地域政党に関する知見を整理することは、学術的な意義のための必要だけでなく、日本における差し迫った社会的要請でもある。

では、政党研究において地域政党はどのように位置づけられてきたか。特に、地域政党研究が豊富なヨーロッパについてどうであろうか。残念ながら、政党システム全体における地域政党の位置づけについては、研究は乏しいと言わざるを得ない。この点を如実に表す研究として、たとえば日野愛郎の「新たな挑戦者政党」(new challenger parties: NCPs) 研究が挙げられる。彼は、「ニュー・ポリティクス政党」「極右政党」に続く NCPs の第3の類型として「エスノ地域主義政党」(Ethno-Regionalist Parties)<sup>3)</sup>を挙げている。そして、研究におい

---

1) 以降、参考文献に日本語版の情報を付記しているものは、適宜邦語版も参照していることとする。日本語版から特に引用をする場合は特記する。

2) 「地域政党」と「地域主義政党」の用語法上の差異、および使い分け方については本稿第2章1節にて後述。

3) エスノ地域主義(政党)とは何かについては第1章5節、および第2章2節を参照のこと。

て依拠したデータベースから具体的に政党のデータを抽出して、研究対象として NCPs に加えるべきかを検討している。しかしその結果、研究で利用したデータ上の制約と、NCPs のヴァリエントとして間違いなく認識することはできないとの理由から、エスノ地域主義政党は分析対象としては排除された (Hino, 2012: 60-2)。概して戦後西ヨーロッパの政党政治史は、社会的亀裂によって規定されてきた既成政党による体制に、日野が言うところの NCPs が参入したことで変化を引き起こしていったと語られることが多い。だが、環境政党をはじめとしたニュー・ポリティクス政党や、排外主義的な急進右翼政党の動向が戦後ヨーロッパ政治研究において常に関心事であったのに対し、各国で必ずしも小さくない規模で活動してきた地域政党は、専門的に追究する研究者からを除いては注目を集めにくい存在であった。その理由は複数考えられ、たとえば「地域政党」(あるいは「地域主義政党」)の定義自体が難しいこと、エスニック政党との違いが分かりづらい——厄介なことに「エスノ地域主義政党」という複合的なカテゴリーも存在する——こと、一般に活動範囲や組織規模が小さく(一部の例外を除いて)国政に与える影響がそれほど大きくなかったこと、などが挙げられる。先行研究やデータの蓄積も豊富とは言えず、日野の研究におけるように意図的に分析対象から除外されることも少なからずある。

しかし、冒頭で既述の通り、日本では近來ことに地域政党に対する関心が集まりつつある。また、ヨーロッパでも、2010 年に地域政党が国政第一党となったベルギー(フランデレン地域)や、長らく既成政党の一角として下院で少なからぬ議席率を確保してきた自由民主党を、2014 年に地域政党が議席数で大きく上回ったイギリス(スコットランド)の事例を見れば分かるように、近年地域政党が選挙で多くの議席を確保する事例が少なからず見受けられる<sup>4)</sup>。以上から、繰り返しになるが、地域政党とは一体いかなる政治組織であるかを

---

なお、この言葉に定訳はないが、管見の限りではエスノ地域主義(政党)と訳するのが一般的である。このほか、民族地域主義政党、地域民族主義政党などの訳も散見される。

- 4) 具体的にどの程度西ヨーロッパで地域(主義)政党が伸長しているかについては、本稿末の資料を参照されたい。

いま一度明確にしておくことは、現代政治学上における急迫の要請である。

地域政党について知るには、地域の運動を抽象的かつ広範に指し示す「地域主義」とは何かについて先に明らかにしなくてはならない。日本では地域主義を正面から取り扱った論考がそれほど多くない。また、数少ない地域主義研究も、個別の事例や概念の一部分を分析するに留まっており、包括的な検討とは言い難い。さらに、類似の概念との相違や派生類型との関係をシステムティックに論じた研究にも乏しい。そこで本稿は、地域主義・地域政党の学説を紙幅が許す限りで体系的に整理し、地域政党研究の見取り図を確立することを目的とする。さらに、特に近年観察される地域主義・地域政党とポピュリズムの関係についても、最新の研究成果からのフィードバックも交えながら論じることを試みる。

## 第1章 地域主義とはなにか

地域政党に関する考察に入る前に、まず「地域主義」(regionalism)という概念について明確にしておく必要がある。特にヨーロッパでは、地域アイデンティティや地域運動に根差した形で地域政党が形成される事例が目立つからである。

地域主義には様々なバリエーションが概念化されており、しかもそれらが相互に関係していないとは言い切れないため、一口にその実像を浮かび上がらせるのは困難である。以下では、地域主義の基本的な意味を明らかにした上で、可能な限り概念の類型を整理する。

### 第1節 「地域」を定義する

まず注意しなければならないのは、地域主義という言葉には大きく2つの用法があるということである。この点について詳らかにする前に、まず「地域」(region)という言葉について改めて確認しておく。

キーティングが説明するところによると (Keating, 1997a: 2)、第1の用法と

しては、国家間の関係や、EU・ASEAN など地域統合を論じる文脈で用いられる。例えば、「西ヨーロッパ」「北アメリカ」「東南アジア」といった、国家集団をひとまとめで指し示すような語法である。しかし第2の用法として、国民国家レベルの下位にある領域的実体 (territorial entity) を指すこともある。これは、ときに境界線を横断する複数の[先述した第1の意味での]地域の中で、複数の国民国家の国境をまたぐこともありうるものとして理解される。また、ホブズボームはその著作の中で、ナショナリズムの観点から、前者に基づいたナショナリズムを「スープラナショナリズム」(supranationalism)、後者を「インフラナショナリズム」(infranationalism) として整理している<sup>5)</sup> (Hobsbawm, 1992: 186-7)。ナショナリズムとの関係は後述するが、ともあれ地域主義は地域という言葉で何を指そうとするかによって大きく意味合いが変わるため、注意が必要である。

本稿では、特にことわりがない限りはキーティングの第2の定義の意味で地域という言葉を用いる。地域主義についても同様で、超国家的な統合プロジェクトではなく、国家の下位レベルに存在する集団の運動を指すこととする。ただ、丸川哲史が論じるように、いずれにせよ地域とは国民国家ないし国家間システムからはみ出さざるを得ないものを指す用語であり (丸川, 2003: 1)、両者が全く無関係であるとは言い難い。この点に関して、たとえば佐藤竺は、EUの推進する分権化がヨーロッパ各国内部の諸民族のアイデンティティ確立への運動を誘発・増幅していると指摘している (佐藤, 2012: 15)。さらに佐藤は、フランス語の斜陽化や公用語だった自国語の否認の発生から、若者を中心として地域語を学習し残そうとする運動が生じていることにも言及している。また、坂井一成からも類似の指摘がある。曰く、エスノ地域主義 (後述) の効用は国民国家の力を相対的に弱めていて、その意味で欧州統合と同じ指向性を持つという (坂井, 1999: 162-3)。本稿の射程を超えるためこれ以上は言及しないが、以上の点は念頭に置いておくべきである。

5) 言葉そのものはホブズボームが案出したものではない。彼によれば、これは『エコノミスト』の表記に従ったものであるという。

## 第2節 地域主義を定義する

それでは、ここで改めて地域主義という言葉に関する定義を確認する。地域主義の意味を普遍的な文脈で確定するということではなく、ここでの目的はあくまで本稿の議論で必要な限りの定義を明示するということである<sup>6)</sup>。

キーティングは、19世紀後半までに形成された地域主義を、近代国家建設に由来する中心－周辺関係の社会的亀裂によって生じた領域的なアイデンティティ（territorial identity）に基づくものであると説明する。たとえばカタルーニャやバスクでは、地域の保守的・伝統主義的なセクターによってしばしば中央政府に対する領域的な対抗が政治化された。そして、領域の概念は中央国家や社会的変化から地域を保護してくれるものとして用いられるようになっていった。また、スコットランドやウェールズでは、連邦化や自立を訴えるリベラルな地域主義も観察された。（Keating, 1998: 22-3, 27-31）

なお、以上のような地域主義は、1920年代までに、不満を持つ地域住民の国家代表システムへの取り込みか、スペインのように政府の手で公然と抑圧されることで、国家に包含されていった。戦後に至っても、1940年代から50年代にかけては、地域における投票行動の「国民化」が進行した。50年代後半以降は地域主義が問題になることもあったが、概ね中央政府による干渉を受け、管理された。状況が変化するのは概ね1970年代以降で、国家による従来の地域発展政策に対する地域からの批判が地域主義の台頭につながったという。なお、少し議論が脇道に逸れるがキーティングが強調していることなので付記すると、彼はさらに、1990年代以降のグローバル化によって「新地域主義」（new regionalism）と呼ばれる現象が起きたことに言及している。彼によると1990年代には、古い国家－地域の原動力（dynamic）に対して、地域・国家・国際レジーム・グローバル市場の間の複雑な関係を組み合わせた態様もたらされた。これは、地域主義にとって国民国家の枠を超越せしめるものである。そして新地域主義は、一方では地域間の不平等が増大したことを、他方では政策形

---

6) とはいえ、先行研究のレビューによる比較検討を行う関係上、一定程度は完全な定義に近似することが予想される。

成の分離により地域における民主的責任が脅かされ、社会的連帯の基礎が弱体化したことを示したという。(Ibid., 34-47; Keating, 1997b: 39-40)

キーティングは領域の「防衛」に重きを置いていたが、それとは方向性の違う定義をする研究もある。スウェンデンは地域主義を「既存の主権国家内で、あるいはその国を超えて、領域をもつサブユニットが自身の影響力を拡大させるプロセスを指し、このプロセスは社会経済的、政治的あるいは文化的な推進力をもつか、またはそれらの力の集合体をもっている」<sup>7)</sup>と定義した(Swenden, 2006: 14)。彼は、地域主義は部分的にボトムアップのプロセスを意味する一方で、地域の自治権レベルを上げるためには中央の同意が必要であるとしている。いずれにしろ、スウェンデンは地域主義を「外部に影響を与える」運動として捉えている。

地域主義は様々な側面から観察される。ロビンソンは、政治の観点から地域主義を3形態に分類している(Robinson, 2015: 250-2)。彼によればまず、異なった地域における投票行動の分岐は、シンプルにその異なった社会的な〔投票者の〕配置の反映である。ロビンソンはこれを「社会的地域主義」(social regionalism)と呼んでいる。第2に、特定の産業への地理的な集中は、ある地域の投票者に、経済的利益を共有する明確な感覚を発展させるかもしれない。これは「経済的地域主義」(economic regionalism)と呼ばれる。そして第3に、投票者の中の重要な集団が、公共財の供給者としてのステート(state)の正当性へ疑義を挟む場合、これを「文化的地域主義」(cultural regionalism)と呼ぶという。ロビンソンは、文化的地域主義の1つの形として離脱主義(secessionism, 後述)を挙げている。

キーティングとスウェンデンでは地域主義における運動がどのように作用しようとするかに相違があった。一方でどちらにも通底するのは、地域主義が「国家の下位において一定の領域に位置する集団」の運動だということである。どのような運動であるかを論じるにあたっては、ロビンソンの説明を踏襲するこ

7) この鉤括弧内の文言は日本語版からの引用(山田訳, 2010: 20)。



とができる。ここまでの議論から本稿では、地域主義を（ややスウェーデンの定義を變形する形で）以下のように定義する：「国家の下位において一定の領域に位置する集団が、地域の利益やアイデンティティを防衛・擁護ないし増大するために、時に境界線を横断しながら社会的・経済的・文化的な影響力を発揮しようとする政治運動」。

以上で、地域・地域主義に関する定義の整理は完了した。以下では、意味の上で地域主義に類似する主要な概念と、先行研究で提示された地域主義の2つのバリエーションについて検討する。

### 第3節 ナショナリズムと地域主義

地域主義をナショナリズム（nationalism）の変種とみなす否かは議論の余地がある点となる。ナショナリズムと地域主義を正確に峻別しようとする、大変な困難が伴う。何故なら、その相違は観察者がネーション（nation）をどの範囲に設定するか（しないか）の選択に依存するからである。また、膨大なナショナリズム研究をすべて網羅することは不可能に近い。いずれについても詳しく検討することは本稿の射程を大幅に超えるが、必要な範囲で以下に整理する。

杉田敦によれば、ネーションには大きく分けて2つの用法がある（杉田、2008：102）。曰く、第1に、「言語、宗教、文化、エスニシティなど、何らかの属性を共有する同質的な人間の群れ」という意味が存在する。こちらの用法の方が古く、具体的には中世ヨーロッパでは出身を同じくする者をナティオ（natio）と呼称していたという。そして第2に、「国家（state）が管轄する範囲の全体、その国家を統治する主体」という意味もある。杉田によれば、この2つの意味が重なり、同質とされる人々と市民権の範囲が一致した場合に、国民国家が成立したと言われた。

なにをもって人々を同質とするかには複数の議論がある。特に有名なものとして、杉田も挙げる通り（同論文：103-4）、フィヒテとルナンの主張が存在する。両者の主張に対しては、政治学史上すでに十分すぎるほど論争も批判も尽くされてきたが、しかしその精髓は未だに重要である。ネーションの境界線を



どこで切り分けるかを、フィヒテが言語共同体に求めたように (Fichte, 1978: 65-7) 一定の基準に準拠するか、ルナンのように住民自身の意志で判断するか (Renan, 1992: 49-55) で、分析・考察の内容も変化するからである。

現代のナショナリズム論でも、全体としてネーションをめぐる論争は収まっていない。大勢としては、国民意識や伝統の自明性を否定してネーションの人工性を主張することが多い。その一方で、ネーションの形成における歴史的な継続性を訴える議論もある。前者のような立場として、たとえばゲルナーは、閉鎖的な共同体である農耕社会から、流動的な分業と見知らぬ他人とのコミュニケーションが要求される産業社会への移行にナショナリズムの形成を見出した (Gellner, 1983: 32-38, 111-2)。すなわち、国家による統一された教育が要請され、人々をして同一的なアイデンティティを形成せしめたという。またアンダーソンは、出版資本主義の到来による印刷物（特に新聞）の普及に注目した (Anderson, 1991: 61-2)。出版資本主義により、その読者となった集団の中で「想像の共同体」(imagined community) が生まれたということである。一方、スミスはネーションを全面的に近代の産物とする議論に反論した (Smith, 1986: 1-5, 32)。曰く、エスニシティやエスニックな共同体は、ネーション形成においてモデルと基礎になる。そしてスミスによると、そのエスニシティを形成する概念として「共通の祖先・歴史・文化をもち、ある特定の領域との結びつきをもち、内部での連帯感をもつ、名前をもった人間集団」<sup>8)</sup>、つまり彼が呼ぶところの「エトニ」という概念が存在するのだという。

それでは、ナショナリズム研究において地域主義はどのように捉えられるのであろうか。国民国家の一部分においてネーションやナショナリズムは別個に成立しうるのか、あるいはそれはナショナリズムとは異なる運動なのか。かかる点はナショナリズム研究から複数の見解が参照できる。先述のように、ホブズボームは国家の下位におけるアイデンティティの高揚をインフラナショナリズムと呼んだ。彼は、時代によって運動の強さや行動様式に違いがあること

8) この鉤括弧内の文言は日本語版からの引用 (巢山ほか訳, 1999: 39)。

は明らかにしているものの、地域における運動をあくまで分離主義ナショナリズム（separatist nationalisms）と表現しており（Hobsbawm, 1992: 139-41, 185-7）、ナショナリズムの一類型として捉えているようである。一方スミスは、よりエスニックな観点から国家の下位における運動を理解する（Smith, 1986: 139-40, 224）。彼は、西ヨーロッパでエスニックな政治体が領域的ネーションに転換していく過程において、それほど文化的に同化されなかったエトニが無視され、従属的な地位にとり残されたことを指摘する。そして現代においては、国家内のエトニがより一層の自治・独立を合法的手段や暴力的手段によって追及することが一般的にみられるという。

ここまでの議論から明らかなことは、地域主義はナショナリズム研究において、（ナショナリズムそのものかどうかはともかくとして）通常の国民国家におけるナショナリズムとは切り分けて検討されているということである。「分離主義」的なナショナリズムであると表現されたり、或いはよりエスニックな観点で考察されたりしているからだ。すなわち、現代的な国民国家よりも下位における、ナショナリズム的あるいはエスニックな運動として解釈されている。この点は地域主義に関わる研究にも共有可能な点で、たとえば一條都子は1970年代スコットランドの事例分析において、同地域におけるアイデンティティの高揚を「マイノリティ・ナショナリズム」と表現している（一條, 1993: 41-4）。一條はこの概念を、「既存の国民国家の内部で当該国家の国民とその境界がぴったり重なり合わないネーションが、政治的な主権を持つべきだとする原則およびその原則に基づく政治の様式」と定義した。彼女が研究においてこの言葉を使用する意図は、マイノリティという表現によってそのネーションの社会内における劣位状態を明示できることにあるという。

上記を踏まえると、地域主義はナショナリズムの変種であると解釈すればよいのだろうか。前節で検討済みだが、地域主義は社会経済的な運動をも包含する概念である。換言すれば、地域主義と呼ばれる概念にナショナリズムという表現を安易に適用することは、エスニシティや文化の側面を読み手に必要以上に想起させる恐れがある。この点に関連して島袋純は、地域主義について「エスノリージョナルな意識」に比重を置く理論を、「エスニック集団への確固た

るアイデンティフィケーションが強力な政治化を生むことは有り得る」と留保はしつつ、なお不適切であるとしている（島袋、1999：20-3）。彼によれば、このような理論はエスニック対立を国家における経済的・機能的対立に置き換えてその利益要求を行う政党がかなりの勢力を持っていることが説明できない。さらに、東欧・第三世界と西欧それぞれにおける地域主義の強度の違い（前者は過激化しやすいことと比べ、後者は穏健）も説明できないという。つまり、島袋の見解を受けて言えることは、地域主義とナショナリズムを完全に同一視することの理論的な不正確さである。

以上から本節のひとまずの結論としては、地域主義という概念はナショナリズムとかなりの共通点を有し、部分的には互換性もあるが、その変種とまでは断言できないというものである。ただし、ナショナリズムではなく敢えて地域主義という言葉を利用するにあたっては、場面次第ではなお慎重が期される。これは、ライブルの研究における注記を確認すると理解しやすい（Laible, 2008: 217）。曰く、ネーションやエスニック・グループ、あるいは特定領域の人々の独立を目指す集団は、「地域的な」（regional）という言葉の使用を非難する。それは、当該集団は地域ではなく、ネーションやステイトを代表している（represent）と主張するからである<sup>9)</sup>。ライブルの説明を筆者なりに換言すれば、文脈次第では地域主義ではなくナショナリズムと表現しなければ政治的に不適切（politically incorrect）になりうる、ということである。かかる点は相当に繊細な問題であり、注意が要される。

ともあれ、本節で地域主義とナショナリズムをめぐる議論を追う中で、これから検討しなければならない更なる課題が浮き彫りとなった。それは第一に、本節で度々出現した「分離主義」なる言葉と地域主義の関わりであり、第二に地域主義とエスニシティの関係である。前者については、類似の用語も併せて

9) なお、ライブルは以上のような注記に続いて、（ベルギーのフランデレンやイギリスのスコットランドを例にとり）国家内の領域構成体（territorial entity）に一般に適合する言葉が他にないという理由から、あえて「地域」という言葉を用いることを宣言している。

次節で考察を行い、後者に関しては第5節で「エスノ地域主義」をめぐる議論から追究していく。

#### 第4節 地域主義・分離主義・離脱主義

地域主義と類似した概念として、分離主義 (separatism) と離脱主義 (secessionism) が存在する<sup>10)</sup>。これらの違いを明確に言語化することも大変難しい。言葉を見るだけでは何が違うのか分かりづらく、意味が混同されて使われていることもあるからである。そこで本稿では、各概念について可能な限りの区別を試みる。

ウィリアムズは、分離主義者 (separatist) を論ずる上で地域主義者 (regionalist) との特徴の比較を行っている (Williams, 1997: 116)。曰く、分離主義者は領域の分離によってのみエスニックな差別が停止しうると主張する。それはつまり、他の国家と同等の主権を形成するものだからである。一方で地域主義者については、国家解体までは必要ないとすることもあるが、[国家の] 内部で起きる物事 (internal affairs) には多元的な特徴を反映すべきだと主張するという。ただ両者には共通点もあり、どちらも独占的な主権空間という本質 (nature of monopolistic sovereign space) が固定された領域に対して類似の挑戦を仕掛けている。ともウィリアムズは付言している。

また、キーティングによる（地域主義ではないが）マイノリティ・ナショナリズムの用語法をめぐる検討も参考になる (Keating, 2001: 21-3)。彼によると、マイノリティ或いは周辺の (periphery) ナショナリストの要求には、まずただ単に「既存の」排他的なナショナル・アイデンティティに代わるものを代表したいのだとするものがある。このような主張では、分離主義的な選択が推進される。他方でやや消極的に、排他的なナショナルリティという考え方を全体として拒否するのではなく、競合的かつ排他的なナショナルリティの主張を代表するものもある。それは、二重もしくは多重の忠誠とアイデンティティ (loyalties

---

10) “secessionism” についても「分離主義」と和訳することがあるが、ここでは判別のために「離脱主義」との訳をあてる。

and identities), そして多様なアリーナにおける行動能力を有する市民 [という考え方] への信頼を準備する. ここには, 同じ言葉がどちらの類型の主張へも適用されているという用語上の混乱が存在するという.

ウィリアムズとキーティングの議論をまとめると, 分離主義は主権を形成することを目的に掲げ, その手段として現状の国家体制の解体を要求する立場である. すなわち, 既存の国民国家におけるナショナル・アイデンティティを拒絶し, その代わりとなる考え方を推進するものである. 一方, 地域主義は必ずしも方策として国家の分解を求めるわけではない. ただ, 少なくとも国内における多元性を確保することを主張する立場をとる. この2つの概念は領域を重視するところに共通点があり, なおその定義分けは曖昧である. 注意すべき点として, 後者の方が国家体制に対する政治的主張においてより穏健になりうるものではあるが, 既存の国家体制を絶対的に肯定するともいえないことが挙げられる. また, 分離主義は主として文化的・政治的なコンテキストで用いられることが予想される言葉であるが, 地域主義は既述の通り社会経済的な運動も包含する用語である. よって, 分離主義は国民国家体制からの分離を特に強調する政治的文脈に供するべきであり, 地域主義はより幅広く領域の防衛や領域内の利益拡大を目指す運動に利用できる用語である<sup>11)</sup>, と解することが妥当である.

では, 分離主義と離脱主義はどのように異なるのだろうか. ウィリアムズやキーティングは後者については言及していないので, 他の研究から知見を得る必要がある. パヴコヴィッチとカプスタンによると (Pavković and Cabestan, 2013: 1-2), 離脱 (secession) は論争的な概念であるが, 離脱の結果 (outcome) [起きること] についてはほぼすべての研究者が同意するという. 曰く, それは「他者によって統治されていた領域において形成された新しい国家 (new state)」であり, 他者とは「離脱に先んじてすでに存在していた国家」のことを言う. 分離主義については, 「政治的目的に基づき, 特定の領域を超える国

---

11) そして, それは必要に応じて分離主義的な運動にも適用可能である.

家の中央政府に存する政治的あるいはその他の権力を減少させ、その権力を住民（population）、あるいは問題となっている領域内の住民を代表するエリートへと移転させることをねらうこと」だと定義する。ウィリアムズやキーティングと異なり、こちらの分離主義の定義は領域の分断というよりは権限移譲に近く、上で論じた地域主義とかなり意味が接近している。

ただ、それでもなお分離主義と地域主義が決定的に違うことは、パヴコヴィッチとカプスタンが離脱主義を分離主義の終着点（the end point）であると説明している点である（*Ibid.*: 2）。すなわち、離脱主義とは、既存の国家から主権の全てを除去することをねらう分離主義のことを指す。そして離脱主義運動の中には、その過去の離脱主義的な目的を公式に破棄することで単なる分離主義になるようなものもある<sup>12)</sup>という。彼らによると、理論的には分離主義から離脱主義へ移行する際の障害は存在しない。ただ、より事実在即した本質としては障害が2つ存在するという。第1に、[離脱主義ではないが]分離主義のある形態を支持する住民は、おそらく離脱主義を支持しないであろうことが挙げられる。そして第2に、ホスト国家が離脱主義を抑圧しながらも、分離主義の一定の形態は許容ないし支持するであろうことだという。

以上、節題の三概念について検討してきた。ウィリアムズとパヴコヴィッチ・カプスタンの間では、一見分離主義の定義に食い違いがあるように見えるが、これは前者が分離主義と離脱主義を区別していないという点に起因する。この点を押さえて改めて概念の意味内容を整理すると、地域主義とは国家からの地域の自律（autonomy）を（時に国家への統合（integration）に対抗する形で）特定の領域から訴えていくという運動で、国家の解体を必ずしも意味しない。それに対し、分離主義は本質的に既存の国家からの脱退を示唆する運動である。そして、既存の国家から完全に主権を取り除く段階に運動が移行すると、それは離脱主義と呼ばれるものになる。言い換えれば、離脱主義は分離主義の一類型であり、牽連性を持つが、地域主義はそうとは限らない。したがって、もと

---

12) 具体例として、アチェ（インドネシア）やチベット（中国）が挙げられている。

より特定の国家からの離脱を現実的な目標とする運動は分離主義と呼んで差し支えないが、そうとは言い切れない場合は地域主義という呼び方に留めるべきである。

## 第5節 エスノ地域主義

地域主義とエスニシティは関連しうるのか。この点に関して折衷的な定義を提供するのが「エスノ地域主義」(ethno-regionalism)である。この概念は、地域主義とエスニシティのどちらの観点からも説明できるような運動を指し示すために用いられる。

エスノ地域主義の定義については、先行研究が少なからず提供している。二宮宏之は、エスノ地域主義を「エトノス性と地域性とを兼ね併せた」運動であるとしている(二宮, 1993: 19-22)。その具体的な事例としてはオクシタニーやブルターニュ(フランス)、カタルーニャやバスク(スペイン)、スコットランドやウェールズ(イギリス)を列挙している。二宮はこの概念を、国民や民族といった枠組みからは見えてこない、ネーション・ステートの内部における地域やマイノリティの自立性、すなわち国家の枠組みの内部における地域の重要性を説明するために用いている。

それでは、地域主義とエスノ地域主義の峻別はどのように行うのか。坂井一成によれば、1960年代末以降にヨーロッパで高揚した地域主義運動のほとんどがエスノ地域主義として捉えうるという(坂井, 1999: 162-3)。曰く、『『地域』が政治力を獲得して行く過程において、『地域』は単に『領域性』だけでなく、多分に『エスニシティ』という要素を含んだ』のだという。坂井の議論をそのまま受容するのであれば、ヨーロッパにおける戦後の地域主義は、その大半がエスニックな要求に基づいた運動であると解釈可能でなる。また、単に地域主義とだけ呼ぶ場合は「領域性」を強調する(エスニシティの問題は含まない)運動を意味するということになる。

より積極的な定義としては、トゥルサンの説明が比較的理解しやすい(Türsan, 1998: 5-6)。トゥルサンは、研究における用語法として以下のように定義する：エスノ地域主義とは、国家(state)との関係の修正をねらいとす



る、西ヨーロッパ国民国家における、エスニックなものに基づいた領域運動（ethnically based territorial movements）、そして、ナショナリズムと似て動員を意味する概念（mobilisational concept）であるという。また、高橋進は、1970年代のヨーロッパにおけるエスニック・マイノリティの再発見からエスノ地域主義の意味を論じている（高橋、2014：25-6）。曰く、ヨーロッパは国民国家の集合だという以上に各国においてマルチ・エスニックであり、マルチ・エスニック構造へ進化しているとの考え方が強くなった。そして、「エスニック・アイデンティティの覚醒を伴う『エスニック』『テリトリー』というクリーヴィッジの再活性化が生じた」。つまり、支配的文化と従属的文化の対立や領域性を強調する地域主義の概念上で、さらにエスニックな主張を前面に出すのがエスノ地域主義だということになる。

以上から、エスノ地域主義とは概ね、エスニック・アイデンティティに基づく特定領域の運動としての地域主義だと考えるのが妥当である。言い換えれば、地域主義の変種と考えて差し支えない。当該概念をめぐる議論は、次章の「エスノ地域主義政党」に関する検討で再考されるため、本節はこれにてひとまずの結びとする。

## 第2章 地域政党とはなにか

本稿では、前章までの地域主義をめぐる議論を踏まえた上で、地域政党という言葉をもとに学術的に正確に把握することを目指す。ここまで、地域における領域運動としての地域主義について検討してきた。しかし、地域主義と密接な関わりを有するとはいっても、それだけでは政治団体としての地域政党の本質は理解できない。地域政党がどのような組織で、いかなる意味で用いられる学術用語であるかは、また別個に議論して明らかにしなくてはならないことである。

### 第1節 地域政党・地方政党・地域主義政党——その定義

「地域政党」・「地方政党」・「地域主義政党」の3語に意味上の相違はある

のだろうか。素直に英語で表記するなら、それぞれ "regional party", "local party", そして "regionalist party" となる。これらの用語に重大な定義の違いがあるのなら、この場で明らかにして今後の検討に反映しなくてはならない。

地域主義政党とはどのような政党なのだろうか。マッツォレーニとミュラーは、地域主義政党について2つの特徴を挙げている (Mazzoleni and Mueller, 2017: 2-3)。第1に、地域主義政党はその「地域」(*region*<sup>13)</sup>)の形態をとり、領域との明確なつながりを規定する。すなわち、社会主義政党や保守主義政党[のような伝統的な政党]であっても、比較的新しい政党類型である環境政党や右翼ポピュリストであっても、通常は社会の中心に位置する普遍主義的なイデオロギーという形をとって非領域的に主張を訴えていくものである。それに対し、地域主義政党は主として特定の地域の防衛と促進 (defend and promote) に立脚する。この排除主義 (exclusivism) は、ナショナリスト政党にも似たものだという。そして第2に、地域主義政党は概して領域的「自律」(*autonomy*<sup>14)</sup>)に関する変化を訴える。つまり、地域主義政党は中心-周辺間の政治権力の垂直的割り当てを修正したいということである。こういった形の主張は多かれ少なかれ急進的なものであり、その要求は文化的な自律から率直な独立[の主張]にまで及ぶという。

一方、ジョリーは様々な地域主義政党の定義を検討した上で、いずれも単なる政治的イシューとは反するような[社会的]亀裂が特徴を定義する上で浮上してくることを指摘している (Jolly, 2015: 18)。ここで亀裂として挙げられているものは社会文化的なものに基づく区分を含んでおり、具体的には社会経済・宗教・エスニシティ・言語が挙げられている。そして、そのような集合的アイデンティティが顕在化した政治組織としての地域主義政党とは、集合的アイデンティティに基づく集団の利益を防衛するものである。とりわけ領域の自律性 (territorial autonomy) と[地域の]能力についての目標 (capacity goals) が強調される。

13) イタリック表記は原文に従ったものである。

14) イタリック表記は原文に従ったものである。

マツォレーニらの研究では、地域主義政党に政治アクター間の関係に変化をもたらすという目標を指摘される一方で、ジョリーは地域主義政党の基盤を社会的亀裂と見る。ただし、そのどちらにおいても相違ないのは、地域主義政党とは領域的な自律を獲得するために活動する政治組織だということである。そして、そのためにより大きな権力や能力を地域へもたらそうとしているという。以上を踏まえてゆるやかに定義するのであれば、地域主義政党とは、「領域の自律性を防衛するための能力の確保を目標に民主制議会で活動する政治組織」ということになる。

それでは、地域政党の定義についてはどうか。ブランカティは、17か国の地域政党を分析対象とした比較計量研究において、地域政党のことを「国内のただ1つの地域で競合し、票を獲得する政党」と定義している（Brancati, 2008: 138）。それに加え、活動拠点となる地域のみに影響を与えるイシューにおける議題（agenda）に焦点をあてる傾向があるという。ジョリーはこのブランカティの定義を指して、[地域政党という呼び方は]政党への支持について地理的な基盤（geographic basis）にのみ焦点があると換言している（Jolly, 2015: 16）。

類似の定義としては、インドを分析対象としたジークフェルドの研究も参考になる（Ziegfeld, 2012: 72-3）。曰く、地域政党とは狭い地理的基礎（narrow geographical base）において選挙上の支持を引き出す政党である。それは、他者（others）の排除を公然と（諸）地域へ訴求し、そうした有権者の動員戦略を訴求の中心（central）とする地域主義政党とは異なるものであるという。さらに、ジークフェルドによれば、地域主義政党はほぼ必ず地域政党だが、地域政党は必ずしも地域主義政党である必要はない。

以上から、地域政党は概ね、地理的な基準から見て活動範囲が特定地域に限定され、かつ掲げる争点もその地域に関わる内容に限られているような政党だと考えるのが妥当である。すなわち、領域の防衛や地域への利益誘導のために活動拠点の外部へも影響を及ぼそうとする地域主義政党とは意味を異にする。ただし、国政に進出しているかどうかは判別の基準とならない。ある政党が特定地域のみで活動しているとしても、それが全国政党や中央政府の政治・政策

方針に対抗する目的で設立された組織であれば、地域主義政党と呼んでも差し支えない。いずれにせよ、地域政党と地域主義政党という 2 つの言葉は、文脈や状況に応じて使い分けなければならない学術用語である。

最後に、地方政党という言葉についても定義を追究する。この用語は地域政党以上に、定義する研究が乏しい。区別していると見なせそうな数少ない説明として、まず眞鍋貞樹の研究が挙げられる。曰く、地域政党には "local party" と "regional party" の 2 つの英訳が存在している (眞鍋, 2011: 64)。そして、前者は英国において全国政党の地方支部を示す際に用いられていることから、地域政党の訳語としては後者の方が適切であるとしている。なお、眞鍋による地域政党の定義は「全国的な既成組織政党とは異なる形態で、地域において中心的に活動する『政党』もしくは『政治団体』」というものである。これは、本稿における地域政党への検討およびその結論と概ね合致する内容となっている。

一方、以上とは異なる定義も存在する。砂原庸介と土野レオナード・ビクター賢は、研究の中で河村和徳による定義を引用しながら、地方政党とは法律上の政党と異なって一般に地域限定での活動を行う一定程度以上の規模の政治団体のことだと定義する (砂原・土野, 2013: 96)。そして、その中には沖縄社会大衆党や生活者ネットワークなど地方特有の争点を掲げて結成された伝統的なものだけでなく、国会議員の「系列」に基づいて形成され、国会議員間の抗争などをきっかけに結成されたものもあるという。この定義だけを見ると、地方政党とは地域政党とほぼ同義ではないかとも思える。しかし、念のため砂原と土野の典拠資料である河村の論考を確認すると、河村が使用している言葉は実際には地域政党であった (河村, 2011: 32)。これは、砂原と土野が地方政党と地域政党を同じ意味で解釈・使用した、換言すれば地方政党と地域政党という言葉の使い分けに意味を見出さなかったということになる<sup>15)</sup>。

以下は筆者の推測の域を出ないが、おそらく眞鍋の定義が地方政党の定義と

15) 筆者が見る限り、何か特別な理由があって砂原と土野があえて「地方政党」という言葉にこだわった理由は見受けられない。

して正しいだろう。もちろん、眞鍋の指摘は“local party”という英語の学術用語についての検討で、直接「地方政党」について論じているわけではない。だが、地域政党との区別の上で見ると、地方政党という言葉が全国政党の地方支部を指すに過ぎないと考えれば、うまく用語の住み分けができる。当該定義の意味するところが地域政党という言葉でも表現しうるものなら、その言葉の使い方は読者の混乱を招くもので、なおかつ無意味である。

以上、節題の3語について検討した。本稿では、状況に応じて地域政党と地域主義政党の2語を使い分けるが、どちらでも意味が通る場合は前者を用いることとする。地方政党については、混乱を回避するため、以降は本稿では使用しない。

## 第2節 エスノ地域主義政党

前章で取り上げたエスノ地域主義に基づき活動する地域主義政党は、「エスノ地域主義政党」(ethno-regionalist party)と呼ばれる。このような政党は、高橋進によれば1960-70年代に台頭し始めた(高橋, 2016: 25-8)。高橋はエスノ地域主義政党の特徴を以下のようにまとめている。第1に、文化的な要求と承認の主張。第2に、エスノ・テリトリアル、またはエスノ・リージョナルなクレーヴィッジ(亀裂)の強調、すなわち既存の主要なイデオロギー軸の横断。そして第3に、小政党であること。別の類似した定義の仕方として、トゥルサンは当該政党類型について「既存の国家における、民族意識と領域的要求に核心をおいたナショナリズムを支持する」としている(Türsan, 1998: 5-6)。曰く、エスノ地域主義政党のもっとも顕著な特徴は、国家の権力構造の政治的な再編成、もしくはある種の「自治」(self-government)、いずれかを要求することである。「エスノ」の接頭辞が付随しない地域主義政党との違いについてはダンドワの説明がしやすい。彼によると、[“ethno-”が外れた]地域主義にとっては領域こそがもっとも重要な特徴であるので、地域(もしくは地域主義)政党はエスニックなラインに沿って創設されるということはないだろう、とのことである(Dandoy, 2010: 197)。ここまでの議論をまとめると、エスノ地域主義政党とは、領域的な要求に加えてエスニックな主張もするようになった地域

主義政党を指している。

1990 年代から現在に至るまでも、エスノ地域主義政党は地方政府への参加・掌握、中央政府への参加、分権化・連邦制化改革などの成果を上げている（高橋、2016:26）。同時期に生じた「集団的アイデンティティのムード」（collective identity mood）は、ナショナルな政治的機会構造の枠組みにおいて、エスノ地域主義政党をしてその組織力を動員させるものであった（Müller-Rommel, 1998: 24）。また坂井一成は、1990 年代以降、国家より小さなレベルでも大きなレベルでも、欧州全体で親エスノ地域的施策が徐々に導入され、もはや不可逆的な動きになっていることを指摘した（坂井：1999：173-4）。彼によれば、この流れは、伝統的に中央集権の伝統が強く、さらに言語ナショナリズムが強いフランスでさえも例外ではないという。

エスノ地域主義政党と一口に言っても、その内実が一樣であるかは直感的に見て疑わしい。この点についてたとえばデウインターは、自治に対する要求の急進性（radicalism）にしたがって以下のように類型している（De Winter, 1998:204-5）。まず第 1 に保護主義政党（protectionist parties）が挙げられる。このような政党の要求は、文化的なアイデンティティの保存と発展を保証する方法を、既存の国家の枠組み内で要求するものである。そして、たいていは地域語（regional language）を地域の公用語として承認するような主張が含まれるという。これに続き、デウインターは第 2 に自律主義政党（autonomist parties）を挙げている。曰く、この政党は現存の中央政府と地域との間の権力共有（power sharing）を受け入れる。しかしそれは、国家内の他の領域的実体（territorial entities）とは異なった扱いを受けながらである。彼によれば、それはすなわちこうした政党が、拠点とする地域へのより大きな自律性を純粋に要求しているという意味で連邦主義者（federalist）ではないということだという。最後に、デウインターはナショナル連邦主義政党（national-federalist parties）を挙げる。こうした政党は、既存の中央集権国家を連邦国家へと再編成しようとする政党である。それは、国家内の全地域に権力を移譲しようとする意味で、一地域に対する自律性の付与よりも急進的な要求をするものだという。

デウインターの類型論は、急進性の最高点として連邦化を置くものであった。しかし、さらに踏み込んで既存の国家からの完全な離脱や、他国への自地域の吸収を望む場合はどうかカテゴライズするのだろうか。この問題を解消し、イデオロギーを基準としてより幅広い事例が包含された類型を提供するのが、ダンドワの類型論である。彼は、ヨーロッパのエスノ地域主義政党を体系的に分類する試みを行った（Dandoy, 2010: 207-11）。ダンドワによれば、エスノ地域主義政党は、大まかに次の3つに類型化できる。まず、文化的・言語的に定義され、領域的に集中したマイノリティの利益を擁護する保護主義政党（protectionist parties）が挙げられている。曰く、このような政党の要求は、概ね文化的・政治的権利の保存・保守に限られる。筆者の見るところでは、この類型はほぼデウインターの第1類型と意味を同じくするものである。次に、中央と地域の間の権力分割に挑戦する分権主義政党（decentralist parties）があるという。曰く、このような政党の主要な目的は体制の転換であり、国家の国内秩序に挑戦するところにある。デウインターの類型と照応すると、彼の第2・第3類型がここに含まれる。そして最後に、主に領域の「所有権」（ownership）の変更を最終目標とし、国際環境にも関係をもつ離脱主義政党（secessionist party）が挙げられている。具体的には、少なくとも新たな独立国家の創造、国際的な境界線の再定義、そしてホスト国家の弱体化といった、国際的なコミュニティへの衝撃を有するという。この類型はデウインターの研究においては類似するところがない<sup>16)</sup>。

ここまでの内容を踏まえると、エスノ地域主義政党は事例によって目指すところを異にすることが多いという点が理解できる。具体的には、地域への文化的・政治的権利を要求する起業家政党（entrepreneur parties）のような立場に留まるものから、分権や自律の強化を目指す政党もあり、さらに拠点とする地域の独立を目指したり当該地域の他国への編入を目標としたりする相当に急進的な政党も存在する。以上から、地域主義政党の中でも、活動拠点となる地

---

16) なお、ダンドワは以上3類型をさらに細かく分類しているが、ここでは省略する。



域の住民にエスニックな共有意識が存在し、かつその意識を有権者の動員に利用するような組織をエスノ地域主義政党と呼ぶことが出来ると本節では結論付ける。その主張の急進性の程度からは「エスノ」であるかどうかという基本的な点については問われないが、党の性質・主張に応じてある程度の類型化は可能である。

### 第3章 地域ポピュリスト政党

本章では、「ポピュリズム」の観点から地域（主義）政党を捕捉しようとする試みについて触れる。まず、ポピュリズムが一体いかなる概念であるのかを手短かに整理する。その後、地域主義とポピュリズムがどのような相互作用をもって政治運動・戦略として現れるかを、政党に着目しながら示していく。

#### 第1節 ポピュリズムとはなにか

ポピュリズムが政治現象として初めて本格的に登場したのは、19世紀のアメリカである（水島、2016：30-2）。経済発展に伴う格差の拡大が、農民や労働者を支持とした人民党（People's Party）による二大政党への挑戦を引き起こしたのである。メニィとシュレルは、アメリカにおけるような19世紀的なポピュリズムの形態は近代的かつ改革主義的（modern and reformist）なものとして知覚されると指摘する一方、現代においては右翼の政治運動と同一視される傾向にあるという（Mény and Surel, 2002: 4）。もっとも、ポピュリズムが左右軸においてどこに位置するかは議論があり、関わりを持たないとするミュデのような論者もいる（Mudde, 2017: 8-9）。彼はラテンアメリカにおけるポピュリズムの事例を挙げて説明しており、新自由主義的なフジモリ（ペルー）と急進左翼的なチャベス（ベネズエラ）を対比させている。

ポピュリズムとは非常に扱いが難しい概念である。たとえばタガートは、ポピュリズムという言葉は悪名高き厄介ものだと表現している（Taggart, 1995: 36）。曰く、ポピュリズムとはアメリカの急進的な農民運動から19世紀ロシ

アのナロードニキによる知識人運動，ペロン主義独裁，スイスの直接民主主義，[アメリカ独立党の] ジョージ・ウォレス，さらにはポーランドの「連帯」（Solidarity）まで包含した言葉である。そしてそれは、一触即発の概念的危険地帯（a conceptual tinderbox）に等しいという。

具体的な事例について触れる前に、まずはポピュリズムとは一体いかなる概念であるかを簡単に整理しておくこととする。タガートは、西ヨーロッパからポスト冷戦時代の中東欧までを広く観察し、ポピュリストの性格的特徴を6つに整理して列挙した。第1に、代表政治への敵意が挙げられている（Taggart, 2003: 6）。これはすなわち、ポピュリズムが代表政治によって形成された政治状況の下にのみ存在するということでもある。

第2に、「ハートランド」（heartland）を伴った自己認識をする傾向にあるという（Ibid.: 6-7）。曰く、ハートランドとは、過去から回想的に構築された理想的な世界の構築物のことを指し、[これまでに] 失われてきたものとして現在に投影されるものである。ハートランドのエッセンスは、それが良き生活（good life）であるということだが、それはユートピアのようなものではなく、過去に経験されたものを指すところにある。つまり、現在は崩壊し歪められているが、それ以前には良き生活が存在したのだ、と仮定ないし主張するものだという。

第3に、核心的価値の欠落が挙げられている（Ibid.: 7）。「ポピュリスト」はしばしば別のイデオロギー的位置に対する形容詞や修飾語として用いられる。そして、各々の使われ方で意味が必ずしも一致するものではない。筆者なりに換言するのであれば、ポピュリズムとはまさにこのようなものを指すのだ、という明確なイデオロギーなど存在しないということである。

第4に、極度の危機という感覚に対する反応という特質も指摘されている（Ibid.: 8）。曰く、ポピュリズムは安定して秩序だった政治体による政治ではなく、変化、危機、そして挑戦に付随するものとして生じる。すなわち、タガートによれば、ポピュリズムは強力な危機の「感覚」（sense）があるときに出現する傾向にある。そして、ポピュリストはそのメッセージに切迫性と重要性を注入するためにその感覚を用いるという。

第5に、政治的である、あるいはそうであると見られることに対して、ポピュリスト自身は自制的であるという特質が挙げられている (Ibid.: 8)。タガートによれば、有権者に対するポピュリストのアピールは、大抵その非通常性 (unusualness) に基礎を持つものである。それゆえ、ポピュリストが政治へと制度化されたとき、彼らは大衆的アピールの主要な部分を不可避免的に失うという。

そして第6に、高度にカメレオンの (chameleonic) であるという点も挙げられるという (Ibid.: 8)。それは、時と場所によっては、ポピュリズムとは何かということに類似性があるかは必ずしも明確ではないという意味である。タガートによれば、ポピュリズムが発生するコンテキストの特質は、ポピュリズムが採る形態にも溢れ出す。それは、ポピュリズムの「本当の」 (real) 性質が隠されているのではなく、単にポピュリズムが事実上実際にコンテキストへ依存している。筆者なりに整理すると、ポピュリズムは場所によって色が絶え間なく変化するカメレオンのように、どのような状況で出現するかによってその性質を変化させるということである。

タガートの概念分析が非常に包括的であるのに対し、ミュデはより端的にポピュリズムの特徴を指摘した。タガートの分析は主にヨーロッパを中心としたものだが、ミュデはヨーロッパだけでなく南北アメリカやアジアも射程に含めた検討を行っている。ミュデによれば、ポピュリズムの核となる概念は人民 (the people)、エリート (the elite)、そして一般意思 (general will) の3つである (Mudde, 2017: 9-19)。人民はさらに3つの意味を含む。具体的には主権 (sovereign)、一般の人民 (the common people)、そしてネーションであり、それはそのまま人民とエリートを区別する政治的権力、社会経済的地位、そしてナショナリティという特徴と関わるのである。そのエリートは、ポピュリズムにおいては、「純粋な」人民 (the *pure* people) に対して「腐敗した」エリート (the *corrupt* elite) として識別される<sup>17)</sup>。そして一般意思については、思

17) イタリック表記は原文に従ったものである。

思想家のルソー（Jean-Jacques Rousseau）が提唱した概念と結びついており、ルソーの言う「一般意思」（volonté générale）および「全体意思」（volonté de tous）に関わるという。ミュデの整理によると、前者は共同体とともに加わり、共通の利益を実行するための法制化を行う人民の能力のことで、後者はある時、個別の瞬間における特定の利益の単純な総和である。純粋な人民と腐敗したエリートの間におけるポピュリズムの一元論的・道徳的区別は、一般意思が存在するという考え方を強化するものだという。

ミュラーは、ミュデが主張するような「反エリート」重視の議論に「反多元主義」の要素を付け加える（ミュラー、2017：27, 30, 102）。曰く、エリート批判は必要条件ではあるが、十分条件にはならない。ポピュリストは常に反多元主義者であり、自分たちだけが人民を代表すると主張する勢力なのだという。彼によれば、ある政治的なアクターや運動をポピュリストと呼ぶには人民の一部が人民そのものであると主張しなければならず、ポピュリストだけが本当の、もしくは真の人民を正しく発見し、代表していると主張することを要する。そして、その多様性の否定は特定の市民の自由であり平等な地位の否定に等しく、それこそがポピュリズムの問題なのだという。筆者が見る限りでは、ミュラーは基本的にポピュリズムを批判する立場にある。彼の主張は、反エリートかつ反多元主義であることがポピュリストの条件で、特に後者が重要だというものである。

## 第2節 地域主義とポピュリズム

前節の内容を踏まえ、改めて地域主義・地域政党とポピュリズムの関係についての検討に戻ることとする。欧米を対象とした研究では、地域におけるポピュリズムの興隆は、特に排外主義的なポピュリズムを念頭に置くことが多かった。たとえばウッズは、イタリアのロンバルディア同盟を対象とした研究において、その論文タイトルに地域ポピュリズム（regional populism）という言葉を用いている（Woods, 1995）。ロンバルディア同盟は、のちにイタリア北部を拠点に急進右翼ポピュリスト政党として活動することとなる北部同盟（Lega Nord: LN）の前身の1つにあたる地域主義政党である。タルキによれば、LN

は当初イタリア北部の方言の再興を掲げ、日常的なコミュニケーションや行政組織においてその使用を主張していた (Tarchi, 2002: 126-7). これによって普通の人民 (ordinary people) の間の連帯を保障し、同時にエリートによる「法律上の国家 (legal country) からの距離を示唆したという. やがて言語についての LN の要求が抜け落ちると、一体的な人民意識を創造しようという試みが別の手段で創り出された. すなわち、中央集権化された国家による搾取への強い嫌悪を強調するスローガンである. このようなスローガンはロンバルディア州、ヴェネト州、そしてピエモンテ州の人々による「地域主義ポピュリズム」(regionalist populism) 運動の活動を高揚させ、やがて「北部の人民」(the people of the North), さらに「パダーニャの人民」(the people of Padania)<sup>18)</sup>といった戦略的な要求へと変容していくものであったという<sup>19)</sup>.

本稿冒頭で引用した日野愛郎の研究でも、彼がカテゴライズするところの「極右政党」の更なる下位類型として「ポピュリスト・エスノ地域主義政党」(Populist Ethno-Regionalist Parties) が挙げられている (Hino, 2012: 38). 日野はこのような政党について、自治 (self-government), および文化／言語の自律性を要求するイデオロギーであると説明し、具体的な事例として LN とベルギーのフラームス・ブロック (Vlaams Blok: VB) を挙げている<sup>20)</sup>. そして先

18) パダーニャとは、高橋進によれば、LN がヴェネトからロンバルディア、エミリア・ロマーニャに至る北イタリアの独自性を主張する際に、北イタリアを指す呼称である (高橋, 2013: 179).

19) LN の主張は時代によってその程度や内容に看過しえぬ相違があるため、注意を要する. LN は当初イタリアの連邦化を訴えていたが、その後要求を北部の独立へ転換して急進化したり、再び権限移譲と連邦制へ政策を変えたりと、時代によって路線に紆余曲折が見られる. また、時代が進むにつれ攻撃対象が南部人から外国人移民・ムスリムへと移っていった. 高橋進は、フォルツァ・イタリアと LN が連合を組む現在のイタリア政治の状況を「ポピュリズムの二重奏」(南部で活動する国民同盟が加わることで「ポピュリズムの三重奏」)と表現している (高橋, 2013: 178-81).

20) VB は 2004 年にフラームス・ベラング (Vlaams Belang) と党名を改めているが、名前以外は同一の政党なので、以降どちらに言及する場合でも区別せずに VB と表記すること

述の通り、日野は急進右翼的ではないエスノ地域主義政党についてはまた区別して言及している。

一方、一般に急進右翼とは見なされにくい地域主義政党をポピュリストとして扱おうとする試みも散見される。たとえば、ベルギーの「新フランドレン同盟」（Nieuw-Vlaamse Alliantie: N-VA）を念頭に置いたものがそれにあたると考えられる。どのような議論があるか（ありうるか）確認するため、ここで詳述する。N-VA は、フランドレン地域とワロニー地域の間で対立が続く戦後ベルギーにおいて、フランドレン地域で活動してきた地域主義政党「人民連合」（Volksunie: VU）から 2001 年に分裂した右派勢力である<sup>21)</sup>。2003 年には 1 議席しか確保できなかったものの、キリスト教民主主義政党と選挙連合を組んだ 2007 年を経て、連合解消後の 2010 年に連邦選挙で第 1 党となっている。

N-VA について簡単に特徴をまとめると以下の通りである。まず、同党は段階的にフランドレンの自治を高めることを当面の目標としており、即時のフランドレン独立までは求めている（松尾，2015：168）。具体的には、短期的に連合国家としてのベルギー（‘confederal’ Belgium）を成立させようと試みている（Maly, 2013: 5）。また、2010 年選挙後の交渉ではいく度も「改革」を要求し、その点では決して妥協しなかった（松尾，2015：131-44）。さらに、移民はフランドレン社会の一部であるという立場を取っており、VB とは異なった立場であることを強調している点も注目に値する（Duerr, 2015: 53-5）。加えて、批判対象であるはずのワロニー地域圏からさえも支持者を取り込もうとしている、との指摘も存在する（松尾，2015：163）。まとめると、特に排外主義を否定している点で急進右翼とは異なった政党であるが、国家体制・制度の改革を

---

ととする。

21) なお、分裂した左派勢力の側は「スピリット」（Spirit）の党名で活動していたが、支持を集められず低迷した。その後「フランドレン進歩党」（Vlaams Progressieven）、「社会自由党」（Sociaal-Liberale Partij）と組織名を改める試みも為されたものの、2009 年の地域圏選挙での大敗後、無条件でフランドレンの環境政党「緑！」（Groen!）に合流した（van Haute, 2011: 206-7）。

妥協せずに（既成政党よりも強く）要求する点では既成政党とも異なった地域主義政党である。

N-VA をポピュリスト政党として扱おうとする試みとして、たとえば水島治郎は、N-VA について「ややポピュリスト的な傾向がある点で [VB と] 似て」いながら、急進右翼よりも「現実的な選択肢」であるとの評価をしている（水島, 2015: 22-3）。また、松尾秀哉は、N-VA をポピュリストと見なすかは議論があると留保をつけつつも、よりはっきりと同党を「反ワロニー」のポピュリストであると指摘している（松尾, 2017: 106-7, 114-5）。

一方ポーウェルスは N-VA をポピュリストとして類型する議論には欠陥があるとしている（Pauwels, 2014: 42-3）。彼は N-VA が反エスタブリッシュメント的なアピールをしていることを認めつつも、以下の 3 点を指摘している。第 1 に、N-VA はフランデレン・レベルにおける民主主義に信頼を置いている。第 2 に、エリート全体を腐敗したものとして退けることを困難にする。キリスト教民主主義政党（既成政党）との選挙連合に加わった。そして第 3 に、保守政党としての N-VA はエリート主義的な特徴を反映しており、そのことと、党自身が人民の声（*vox populi*）と見なされているということにそれほど関係はない。

カルクホーヴェンはより折衷的な見解を示している（Kalkhoven, 2014: 10-1）。彼は、反エリート主義的な特徴が N-VA にないことは認めている。その一方で、有権者へのアピール様式や党首バルト・デウェバー（Bart De Wever）の言動に注目すると、それがまさにポピュリスト的な（＝ポピュリストによってこれまで歩まれてきた）足跡を立証しているということはあるとしている<sup>22)</sup>。

ここから、ミューデ的な「人民対エリート」の構図の不在を重視すると、N-VA はポピュリスト政党ではないという帰結に至るということが分かる。一方で、有権者への訴求スタイルや政治家の言動を鑑みると、ポピュリストと見

22) なお、カルクホーヴェンは最終的には N-VA をポピュリストと見なし、分析事例に加えている。



なしても不思議はないとも考えられる。

実際のところ、N-VA は前身政党である VU からの連続性を強調されることも多い。たとえばベイエンスらは、いくつかの面で N-VA は明確かつ完全に新しいものの、別の面はその新しさは相対的であり、「後継者政党」（successor party）であると評価した（Beyens, Deschouwer, van Haute, and Verthé, 2015: 9-10）。曰く、同党は溶解した N-VA から相続した一部の有権者、活動家、政党組織、政治家、そして財政的資源を頼みとすることで、[政党配置の] 図上に自身を位置づけることができたという。類似の立場をとる津田由美子も、地域主義政党としての立場を前面に出した N-VA を VU の正式な後継者と見ており、それが VB から票を奪う帰結をもたらしたとしている（津田, 2017: 389）。

しかし、ここまで論じてきたような議論は転換を要されている。ある政党や政治家をポピュリズムと指摘すること自体は、既にあまり意味のないことになりつつあるからである。ミュデが指摘するところでは、現代の西洋民主主義における政治では、ポピュリスト的な言説は（ポピュリスト自身がそう主張しているということではなく、実態的に）メインストリームになった（Mudde, 2004: 562）。彼はこのことを「ポピュリスト時代精神」（populist Zeitgeist）と表現している。つまり、現在の民主主義的政治体制においては、ポピュリズムは決して特異な現象ではなく、どのようなアクターでもポピュリストになりうる、あるいは実際にそうだということである。ポピュリズムをめぐる議論において、ある一点では当てはまるが、別の点では当てはまらないのでポピュリストとは言えない、という議論は厳格に過ぎる。この点において、反エリートというポピュリストの特徴を反ワロニーに読み替えた松尾の見解は適切である。

以上の点を踏まえた N-VA についての筆者の見解は、確かに反エリートのとはいえないものの、VB も含めた既成勢力に対抗する組織としての側面を強く持ち、そのために特定の地域住民を（対立する勢力としての）他地域に対する権力要求を掲げながら動員するという点ではポピュリストと言えるというものである。とはいえ、なおも N-VA が典型的なポピュリストだとはいえないことも事実である。特にミューラー的な反多元主義を重視する観点から見ると、

ワロニーとの地域対立を党の姿勢として前面化している点は該当するかもしれないが、移民に対する排外主義の立場をとらない点をどう評価するかは難しいところである。

そこで、筆者は N-VA をポピュリスト政党として適切に類型化することを試みた。すなわち、まずポピュリズムの手法に基づいて地域主義の主張を訴えていく政党を包括的に「地域主義ポピュリスト政党」とラベリングした（宮内、2017：39-41, 62；（公開文献としては、分析の途上にある論考だが）宮内、2016：24-5）。そして、一方で反移民的・排外主義的である VB のような地域主義政党が存在し、他方ではより政策に現実味があり、排外主義は排除するものの、既成政党が行うような駆け引きや妥協よりも全面的な提案を志向する N-VA というポピュリストかつ地域主義政党も出現したことを明らかにした。つまり、急進右翼的・排外的でなく、かつ反エスタブリッシュメントな姿勢をとるポピュリスト的かつ地域主義政党はありうるということである。ここに若干修正を加えるとすれば、筆者が見るところ——今回の検討も併せて考慮すると——地域政党がポピュリストであるという場合には（地域主義とは関わりを持たない）単なるポピュリスト政党であると考えられるため、当該概念を指す際は地域主義政党と冗長にすべて表記せずとも「地域ポピュリスト政党」（Regional Populist Parties）のみで足りる<sup>23)</sup>。

ところで、そもそも地域主義とポピュリズムの合流はヨーロッパにおけるユニークな現象であるのだろうか。この疑問は日本に目を向けると解消する。日本では近年、橋下徹率いる「大阪維新の会」や河村たかしの「減税日本」など、地域レベルの首長が指導的地位を務める地域政党の台頭が少なからず観察される<sup>24)</sup>。選挙において、前者は大阪都構想、後者は恒久減税を掲げ、「敵対するエ

23) あるいは「ポピュリスト地域政党」（populist regional parties）と表記すべきかもしれない。これは、ポピュリストであることを強調したいか、地域主義政党であることを強調したいかによっても変化してくるだろう。

24) 2017 年の「都民ファーストの会」の事例がここに該当するかは、同党のさらなる事後経過が明らかになるまで評価を控えたい。

リート勢力を『悪玉』として明確に示す」というポピュリスティックな主張を掲げた（眞鍋，2011：76-7；鉤括弧内は引用）。減税日本については検討の余地があるが、大阪維新の会についてはその後「日本維新の会」という国政政党を立ち上げて大阪都構想の実現を追求していったことから、実質的に地域主義政党であると考えて差し支えない。つまり、ベルギー以外でも（全く同一かはともかく）類似の現象が起きており、地域ポピュリスト政党の台頭は議会制民主主義国において普遍的に発生しうる現象であると推測される。そうした、地域主義とポピュリズムが合流するより詳細かつ頑健なメカニズムの提示については、今後の研究課題としたい。

## 第4章 総括

第1章では、地域あるいは地域主義の定義を行いつつ、隣接概念や派生概念の検討を行った。地域とは多様な定義を持つが、本稿における地域主義の意味内容からは、国民国家レベルの下位に位置する領域を指すものである。地域主義とは、特定の領域に位置する勢力が、その防衛と利益拡大のために外部にも影響を与えようとする運動のことを指す。それは、必ずしも国民国家体制の解体を含意しない点では分離主義・離脱主義運動と明確に異なるものである。なお、地域主義の枠組みとエスニック集団の地理的配置が一致すると、エスノ地域主義と呼ばれる概念で呼称できるものとなる。

第2章では、地域主義に基づいて活動する政党について検討した。地域政党が地理的な活動範囲とその主張の限定性で規定される政治組織であるのに対し、地域主義政党は活動拠点となる地域の外部にも影響を及ぼそうとする組織であった。中でも、エスノ地域主義に依拠して活動するエスノ地域主義政党は、主張の急進性にしがたって様々に類型化されている。

さらに第3章では、近年はポピュリズムの手法で活動する地域ポピュリスト政党の台頭を確認した。そして、それが議会制民主主義体制においてはある程度普遍的な現象であることも示唆された。

地域（主義）政党研究に関する日本での近年の関心の高まりは注目に値するが、それは個別の事例に対する場当たりの分析に帰してはならない。よりダイナミックに地域主義の観点から体系的に論ずることが重要であり、その1つの指針を示すことが本稿の目的となる。今後の地域レベルでの政党活動についても、理論の上でマクロな視点から分析を行うことが、地域政党をめぐる政治状況の実態把握への貢献に繋がるであろう。

## 参考文献

- Anderson, B. (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origins and Spread of Nationalism* (Revised Edition), London: Verso. (白石隆・白石さや訳. (2007)『定本想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』, 書籍工房早山)
- Beyens, S, Deschouwer, K, van Haute, E, and Verthé, T. (2015) “Born Again, or Born Anew: Assessing the Newness of the Belgian Political Party New-Flemish Alliance (N-VA)”, *Party Politics*, Epub ahead of print 30 August. 10.1177/1354068815601347.
- Brancati, D. (2008) “The Origins and Strengths of Regional Parties”, *British Journal of Political Science*, 38 (1) .
- Dandoy, R. (2010) “Ethno-Regionalist Parties in Europe: A Typology”, *Perspective on Federalism*, 2 (2) .
- De Winter, L. (1998) “Conclusion: A Comparative Analysis of the Electoral, Office and Policy Success of Ethnoregionalist Parties”, in De Winter, L, and Türsan, H, eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London: Routledge.
- Duerr, G.M.E. (2015) *Secessionism and the European Union: The Future of Flanders, Scotland, and Catalonia*, Lanham, Maryland: Lexington Books.
- Fichte, J.G. (1978) [1808] *Reden an die Deutsche Nation*, Hamburg: Felix Meiner Verlag. (細見和之・上野成利訳. (1997)「ドイツ国民に告ぐ」, E・ルナン, J・G・フィヒテ, E・バリバール, J・ロマン, 鶴飼哲. (鶴飼哲・

- 大西雅一郎・細見和之・上野成利訳）『国民とは何か』，インスクリプト）
- Gellner, E. (1983) *Nations and Nationalism*, Oxford: Basil Blackwell. (加藤節  
監訳. (2000) 『民族とナショナリズム』, 岩波書店)
- Hino, A. (2012) *New Challenger Parties in Western Europe: A Comparative  
Analysis*, Abingdon: Routledge.
- Hobsbawm, E.J. (1992) *Nations and Nationalism since 1780: Programme,  
Myth, Reality* (Second Edition) , Cambridge: Cambridge University Press.  
(浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳. (2001) 『ナショナリズムの歴史と現在』,  
大月書店)
- Jolly, S.K. (2015) *The European Union and the Rise of Regionalist Parties*,  
Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Kalkhoven, L. (2014) "Populist Ideological Stances in Western Europe:  
Contemporary Populism in the Low Countries in the Light of the European  
Context", *PCS-Politics, Culture and Socialization*, 4 (2) .
- Keating, M. (1997a) "Introduction", in Keating, M, and Loughlin, J, eds. *The  
Political Economy of Regionalism*, London: Routledge.
- . (1997b) "The Political Economy of Regionalism", in Keating, M, and  
Loughlin, J, eds. *The Political Economy of Regionalism*, London: Routledge.
- . (1998) *The New Regionalism in Western Europe: Territorial Restructuring  
and Political Change*, Cheltenham: Edward Elgar.
- . (2001) *Nations against the State: The New Politics of Nationalism in  
Quebec, Catalonia and Scotland* (Second Edition) , Basingstoke: Palgrave  
Macmillan.
- Laible, J. (2008) *Separatism and Sovereignty in the New Europe: Party  
Politics and the Meanings of Statehood in a Supranational Context*, New  
York: Palgrave Macmillan.
- Lipset, S.M., and Rokkan, S. (1967) "Cleavage Structures, Party Systems, and  
Voter Alignments: An Introduction", in Lipset, S.M., and Rokkan, S, eds.  
*Party Systems and Voter Alignments: Cross-National Perspectives*, New

York: The Free Press. (白鳥浩・加藤秀治郎訳. (2012)「クリヴィジ構造, 政党制, 有権者の連携関係」, 加藤秀治郎・岩淵美克 (編).『政治社会学』第4版, 一藝社)

Maly, I. (2013) “‘Scientific’ Nationalism: N-VA, Banal Nationalism and the Battle for the Flemish Nation”, *Tilburg Papers in Culture Studies*, Paper 63, <https://www.tilburguniversity.edu/research/institutes-and-research-groups/babylon/tpcs/>, Tilburg University.

Massetti, E, and Schakel, A.H. (2015) “From Class to Region: How Regionalist Parties Link (and Subsume) Left-Right into Centre-Periphery Politics”, *Party Politics*, 21 (6) .

Mazzoleni, O, and Mueller, S. (2017) “Introduction: Explaining the Policy Success of Regionalist Parties in Western Europe”, in Mazzoleni, O, and Mueller, S, eds. *Regionalist Parties in Western Europe: Dimensions of Success*, Abingdon: Routledge.

Mény, Y, and Surel, Y. (2002) “The Constitutive Ambiguity of Populism”, in Mény, Y, and Surel, Y, eds. *Democracies and the Populist Challenge*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Mudde, C. (2004) “The Populist Zeitgeist”, *Government and Opposition*, 39 (4) .

--. (2017) *Populism: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press.

Müller-Rommel, F. (1998) “Ethnoregionalist Parties in Western Europe: Theoretical Considerations and Framework of Analysis”, in De Winter, L, and Türsan, H, eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London: Routledge.

ParlGov. (<http://www.parlgov.org/>, last visited. 3 August 2017)

Pauwels, T. (2014) *Populism in Western Europe: Comparing Belgium, Germany, and the Netherlands*, London: Routledge.

Pavković, A, and Cabestan, J-P. (2013) “Secession and Separatism from a Comparative Perspective: An Introduction”, in Pavković, A, and Cabestan,

- J-P, eds. *Secessionism and Separatism in Europe and Asia: To Have a State of One's Own*, Abingdon: Routledge.
- Robinson, G. (2015) "Regional Place-Based Identities and Party Strategies at the 2013 Federal Election", in Johnson, C, Wanna, J, and Lee, H-A, eds. *Abbott's Gambit: The 2013 Australian Federal Election*, Canberra: ANU Press.
- Renan, E. (1992) [1882] "Qu'est-ce qu'une Nation?: Conférence Faite en Sorbonne, le 11 Mars 1882", in Renan, E. (Roman, J, ed.) *Qu'est-ce qu'une Nation? et Autres Essais Politiques*, Paris: Presse Pocket. (鵜飼哲訳. (1997) 「国民とは何か」, E・ルナン, J・G・フィヒテ, E・バリバール, J・ロマン, 鵜飼哲. (鵜飼哲・大西雅一郎・細見和之・上野成利訳) 『国民とは何か』, インスクリプト)
- Smith, A.D. (1986) *The Ethnic Origins of Nations*, Oxford: Basil Blackwell. (巢山靖司・高城和義・河野弥生・岡野内正・南野泰義・岡田新訳. (1999) 『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』, 名古屋大学出版会)
- Swenden, W. (2006) *Federalism and Regionalism in Western Europe: A Comparative and Thematic Analysis*, Basingstoke: Palgrave Macmillan. (山田徹訳. (2010) 『西ヨーロッパにおける連邦主義と地域主義』, 公人社)
- Taggart, P. (1995) "New Populist Parties in Western Europe", *West European Politics*, 18 (1) .
- . (2003) "The Populist Turn in the Politics of the New Europe", prepared for presentation at the 8th Biannual International Conference of the European Union Studies Association conference, Nashville, 27-9th March, Available at Archive of European Integration: <http://aei.pitt.edu/id/eprint/2962>.
- Tarchi, M. (2002) "Populism Italian Style", in Mény, Y, and Surel, Y, eds. *Democracies and the Populist Challenge*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Türsan, H. (1998) "Introduction: Ethnoregionalist Parties as Ethnic Entrepreneurs", in De Winter, L, and Türsan, H, eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London: Routledge.



- van Haute, E. (2011) “Volksunie, Nieuw-Vlaamse Alliantie, Spirit, Vlaams-Progressief”, in Delwit, P, Pilet, J-B, and van Haute, E, eds. *Les Partis Politique en Belgique* (3<sup>e</sup> Édition) , Brussels: Édition de l'Université de Bruxelles.
- Williams, C.H. (1997) “Territory, Identity and Language”, in Keating, M, and Loughlin, J, eds. *The Political Economy of Regionalism*, London: Routledge.
- Woods, D. (1995) “The Crisis of Center-Periphery Integration in Italy and the Rise of Regional Populism: The Lombard League”, *Comparative Politics*, 27 (2) .
- Żakowski, K. (2013) “New Parties in Japan: in the Search of a “Third Pole” on the Political Scene”, available at the University of Lodz Repository:  
<http://dspace.uni.lodz.pl:8080/xmlui/handle/11089/5978>.
- Ziegfeld, A. (2012) “Coalition Government and Party System Change: Explaining the Rise of Regional Political Parties in India”, *Comparative Politics*, 45 (1) .
- 一條都子. (1993) 「西ヨーロッパにおけるマイノリティ・ナショナリズムの高揚——1970年代のスコティッシュ・ナショナリズムの事例を中心に」, 『社会学評論』第44巻1号.
- 金井利之. (2013) 「《地域における政党》と「地域政党」」, 『自治総研』第419号.
- 河村和徳. (2011) 「地域政党の新時代到来?」, 『月刊地方自治職員研修』第44巻4号.
- 木戸衛一. (2015) 『変容するドイツ政治社会と左翼党——反貧困・反戦』, 耕文社.
- 坂井一成. (1999) 「欧州統合過程における「地域」の位相——領域性とエスニシティの交差」, 『国際政治』122号.
- 佐藤竺. (2012) 「ベルギーのリージョナリズム——共同体・レジオンの強化と県への影響」, 『自治総研』第404号.
- 島袋純. (1999) 『リージョナリズムの国際比較——西欧と日本の事例研究』, 敬文堂.
- 杉田敦. (2008) 「国民／ネーション」, 今村仁志・三島憲一・川崎修 (編). 『岩

波社会思想辞典』，岩波書店。

砂原庸介，土野レオナード・ビクター賢．（2013）「地方政党の台頭と地方議員候補者の選挙戦略——地方議会議員選挙公報の分析から」，『レヴァイアサン』53号。

高橋進．（2013）「ポピュリズムの多重奏——ポピュリズムの天国：イタリア」，高橋進・石田徹（編），『ポピュリズム時代のデモクラシー——ヨーロッパからの考察』，法律文化社。

——．（2016）「エスノ・リージョナリズムの隆盛と「再国民化」——「国家」・「国民」の分解か「礫岩国家」化か」，高橋進・石田徹（編），『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ——新たなナショナリズムの隆盛と移民排斥のゆくえ』，法律文化社。

津田由美子．（2017）「ベルギーにおけるポピュリズムと地域主義政党——フレームス・ブロック（フレームス・ベラング）を中心に」，『關西大學法學論集』第66巻5・6合併号。

二宮宏之．（1993）「歴史的思考の現在」，『歴史への問い／歴史からの問い』（『岩波講座社会科学の方法』第9巻），岩波書店。

松尾秀哉．（2015）『連邦国家ベルギー——繰り返される分裂危機』，吉田書店。

——．（2017）「合意型民主主義におけるポピュリズムの成功——ベルギーを事例に」，中谷義和・川村仁子・高橋進・松下冽（編），『ポピュリズムのグローバル化を問う——揺らぐ民主主義のゆくえ』，法律文化社。

眞鍋貞樹．（2011）「首長による地域政党の動向——地域民主政か，ポピュリズムか」，『拓殖大学政治行政研究』第3号。

丸川哲史．（2003）『リージョナリズム』，岩波書店。

水島治郎．（2015）「「民衆の代表」か「防疫線」か——ベルギー・フランデレンのポピュリズム政党」，『千葉大学法学論集』第29巻4号。

——．（2016）『ポピュリズムとは何か——政治への期待と幻滅』，岩波書店。

宮内悠輔．（2016）「欧州におけるポピュリズムの新類型？——ベルギーの地域主義政党「新フレームス同盟」」，『立教大学大学院法学研究』第48号。

——．（2017）「現代ヨーロッパにおける地域主義ポピュリスト政党の台頭と競

合——ベルギー・「新フラーズ同盟」の事例」, 修士学位論文, 立教大学大学院法学研究科 [非公開].

J=W・ミュラー. (板橋拓己訳) (2017)『ポピュリズムとは何か』, 岩波書店.

## 謝辞・注記

本稿は立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR, 大学院学生研究）の支援を受けて執筆したものである.

本稿は 2017 年 11 月 20 日に脱稿した.

資料：国政選挙で議席を獲得した西ヨーロッパ地域主義政党の議席／得票率

国	政党名	政党名(原語)	活動地域	最高議席率 <sup>1</sup>	最高議席率到達年	最高得票率 <sup>2</sup>	最高得票率到達年
イギリス	社会民主労働党	Social Democratic and Labour Party	北アイルランド	0.6%	1992	0.61%	1997
	シン・フェイン	Sinn Féin	北アイルランド	0.8%	2005	0.6%	2010
	スコットランド国民党	Scottish National Party / Pàrtaidh Naiseanta na h-Alba	スコットランド	8.6%	2015	4.74%	2015
	ブライド・カムリ	Plaid Cymru	ウェールズ	0.4%	1992	0.7%	2001
	民主ユニオニスト党	Democratic Unionist Party	北アイルランド	1.4%	2005	0.9%	2005
イタリア	ヴァルドテーヌ連合	Union Valdôtaine	ヴァッレ・ダオスタ	0.2%	1958	0.11%	1987/1992
	サルデーニャ行動党	Partito Sardo d'Azione	サルデーニャ	0.3%	1987	0.44%	1987
	自治運動	Movimento per l'Autonomia	シチリア	1.3%	2008	1.12%	2008
	自治自由民主主義	Autonomie Liberté Démocratie	ヴァッレ・ダオスタ	0.2%	2006/2008	0.09%	2006
	北部同盟	Lega Nord	イタリア北部	18.6%	1994	10.07% <sup>*3</sup>	1996
	南チロル人民党	Südtiroler Volkspartei	南チロル	0.8%	2013	0.6%	1994

スイス	ジュネーヴ 市民運動	Mouvement Citoyens Genevois	ジュネーヴ	0.5%	2011/2015	0.44%* <sup>3</sup>	2011
	ティチーノ同盟	Lega dei Ticinesi	ティチーノ	1%	1991/1999	1.4%* <sup>3</sup>	1991
スペイン	アラゴン会議	Chunta Aragonesista	アラゴン	0.3%	2000/2004	1.92%	2014
	アラゴン 地域主義党	Partido Aragonés Regionalista	アラゴン	0.3%	1977/1979/1986 /1989/1993	1.41%	2011
	アンダルシア党	Partidu Andalucista	アンダルシア	1.4%	1979	1.82%	1979
	カタルーニャ 共和主義左翼	Esquerra Republicana de Catalunya	カタルーニャ	2.6%	2015/2016	2.63%	2016
	カナリア連合	Coalición Canaria	カナリア諸島	1.1%	1993/1996/2000	1.09%	2000
	ガリシア・ ナショナリスト ブロック	Bloque Nacionalista Galego	ガリシア	0.9%	2000	1.34%	2000
	集中と同盟	Convergència i Unió	カタルーニャ	5.1%	1986/1989	5.07%	1989
	人民統一	Herri Batasuna	バスク	1.4%	1986	1.15%	1986
	バスク国民党	Euzko Alderdi Jeltzalea	バスク	2.3%	1977/1982	1.89%	1982
	バスク左翼	Euzkadiko Ezkerra	バスク	0.6%	1986/1989	0.53%	1986
	バスク連帯	Eusko Alkartasuna	バスク	0.6%	1989	0.67%	1989
	バレンシア連合	Union Valenciana	バレンシア	0.6%	1989	0.71%	1989
ドイツ	バイエルン党	Bayernpartei	バイエルン	4.2%	1949	4.2%	1949
	民主社会党* <sup>4</sup>	Partei des Demokratischen Sozialismus	ドイツ東部諸州	5.4%	1998	5.1%	1998
フィンランド	スウェーデン 人民党	Svenska folkpartiet	スウェーデン 語圏	7%	1951	7.3%	1948 /1951
ベルギー	新フランドレン 同盟* <sup>5</sup>	Nieuw-Vlaamse Alliantie	フランドレン	22%	2014	20.26%	2014
	人民連合	Volksunie	フランドレン	10.3%	1974	11.1%	1971
	フラームス・ブ ロック/フラーム ス・ベラング* <sup>6</sup>	Vlaams Blok/Vlaams Belang	フランドレン	12%	2003	12%	2007

ベルギー	フランコフォン民主戦線	Front Démocratique des Francophones	ブリュッセル	5.1%	1978	5%	1974
	リスト・デデッケル	Lijst Dedecker	フランデレン	3.3%	2007	4.03%	2007
	フロニー集会	Rassemblement Wallon	フロニー	6.6%	1971	6.7%	1971

出典：以下の文献を基に筆者作成：

Dandoy, R. (2010) “Ethno-Regionalist Parties in Europe: A Typology”, *Perspective on Federalism*, 2 (2), pp.207-214;

Jolly, S.K. (2015) *The European Union and the Rise of Regionalist Parties*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp.19-23;

Massetti, E, and Schakel, A.H. (2015) “From Class to Region: How Regionalist Parties Link (and Subsume) Left-Right into Centre-Periphery Politics”, *Party Politics*, 21 (6), pp.875-876;

ParlGov. (<http://www.parlgov.org/>, last visited, 3 August 2017) ;

宮内悠輔. (2017) 「現代ヨーロッパにおける地域主義ポピュリスト政党の台頭と競合——ベルギー・「新フラームス同盟」の事例」, 修士学位論文, 立教大学大学院法学研究科 [非公開], 124 頁.

\*1: ParlGov の情報を基に「獲得議席数÷総議席数」を行い, 小数第 2 位を四捨五入して算出した.

\*2: ParlGov の記載データより.

\*3: 一部の年のデータが ParlGov に存在せず, 情報が入手できなかった. そのため, 正確には最高得票率ではない可能性がある.

\*4: 民主社会党は, 2005 年選挙ではドイツ西部で活動する「選挙オルタナティヴ・労働と社会的公正」(WASG) と選挙協力体制を組んだ. その際, 党名を「左翼党・民主社会主義党」に改め, WASG や他党派候補者をリストに加えて選挙に臨んでいる. ゆえに, この時点で同党を地域主義政党として類型することができなくなると判断し, 2005 年選挙のデータは反映していない. なお, 同党はさらに 2007 年に党名を「左翼党」に変更した. 木戸衛一. (2015) 『変容するドイツ政治社会と左翼党——反貧困・反戦』, 耕文社, 98-105 頁.

\*5: キリスト教民主フランデレン党と選挙連合を組んでいた 2007 年は対象外とする.

\*6: フラームス・ブロックとフラームス・ベラングは, 党名が前者から後者変わったという以外に大きな変更点がないため, 実質的に同一の政党とみなす.